

EQ カーブ対応トーンコントロールの調整(4)(HP 収載)
-Leak Point 1 のトーンコントロールの調整(1)-

1. 始めに

前報(2)と前報(3)の結果を受けて、Garrd401 の再生でトーンコントロールの調整を検討します。

2. トーンコントロールの調整方法

配線は以下のように Garrd401 再生の Leak Point 1 を、フォノステージを有するプリアンプとして機能させ、トーンコントロール機能を活用します。

Garrd401→STAGE1030→Leak Point1(フォノ入力)→TruPhase

今回は前報(1)の Table B に従った前報(2)と前報(3)の結果を受け、Leak Point 1 のトーンコントロールを調整します。

使用するアナログ盤は前報(2)と前報(3)でを使用した次のものです。

LONDON SLC 1331

ベートーヴェン ピアノソナタ 18 番

ウイルヘルム・バックハウス (ピアノ)

ドイツグラモフォン MG 9542

ベートーヴェン ピアノソナタ 18 番

ウイルヘルム・ケンプ (ピアノ)

TRIO (ACharlin) PA-1116

ベートーヴェン ピアノソナタ 31 番

エリック・ハイドシエック(ピアノ)

CBS Sony 25AC 100

ベートーヴェン ピアノソナタ 31 番

ラザール・ベルマン (ピアノ)

3. トーンコントロールの調整結果

それぞれ前報(2)と前報(3)のトーンコントロールの結果を受けて、イコライザーカーブも位相も第4時定数も調整できませんので、RIAA再生からのトーンコントロールの調整のみとなります。

バックハウス盤は、前報(2)の結果からトーンコントロール調整を Bass は 3 時、Treble を 3 時とすることで、キャンつきが後退し、低音の量感が出て、バックハウスらしい重量感のあるピアノリズムが展開します。しかしながら逆相の本盤の位相反

転ができませんので定位の曖昧さは残ります。

ケンブ盤は、前報(2)の結果からトーンコントロール調整は Treble を 3 時にして聴いていきましたが、バランスよく堅実なピアノリズムが聴けます。しかしながら逆相の本盤の位相反転ができませんので定位の曖昧さは残ります。

ハイドシェック盤は、前報(3)の結果からトーンコントロール調整を Bass は 2 時、Treble を 3 時としましたが、アタック感に向上に関して、後者は 2 時でも十分であり、クリアーで優しく美しいハイドシェックのピアノリズムが再現されます。しかしながら逆相の本盤の位相反転ができませんので定位の曖昧さは残ります。

ベルマン盤は、前報(3)の結果からトーンコントロール調整を Bass は 3 時、Treble を 3 時としましたが、アタック感に向上に関して、後者は 2 時でも十分で、クリーンでキラキラと輝かしいベルマンのピアノリズムが再現されます。しかしながら逆相の本盤の位相反転ができませんので定位の曖昧さは残ります。

以上から、位相反転ができないことは仕方がありませんが、真空管プリでありながら、適度な切れ味や解像度が得られることから、このシステムでトーンコントロールを活用してこなかったことを悔やんでいます。

4. まとめ

フォノステージが ZANDEN Mode l120 であった前報(2)と(3)のトーンコントロールの調整が、フォノステージを Leak Point 1 にした場合でも概ね再現されました。

以上